

子宮がん検診（施設）

動 向

平成26年度における子宮がん施設検診受診者数は、頸がん16,947名（前年度比482名減）、体がん556名（前年度比218名減）で、受診者総数は前年より減少した。頸がん受診年代は40歳から59歳が11,628名で全体の68.6%で、体がんの40歳から50歳は424名で76.3%が締めている。また頸がん、体がん共に20歳代の受診者は10%に満たない状況となっている。

子宮頸がん細胞は、原因となるHPV（ヒトパピローマウイルス）の感染より5年から10年をかけて増殖するといわれている。定期的に検診を受けていればがんになる前の段階で診断することも可能で、特に子宮頸がんでは20歳代から30歳代という若い世代の方もかかりやすいがんである。

国が示している、「がん予防重点健康教室及びがん検診実施のための指針」では、20歳以上の方が2年に1度の受診を勧めている。検診とともに、「子宮がん予防」「子宮がん検診について」「治療方法」などの理解を深め、検診の必要性を説いていく必要があると考える。

結 果

（1）子宮頸がん検診

平成26年度の子宮頸がん検診受診者数は16,947名であった。年齢階級別受診者数は40歳代が最も多く28.7%であり、次いで50歳代23.3%、30歳代17.7%の順であった。子宮頸がん、異形成の発生頻度が高いとされている29歳以下の受診者の割合は7.6%と極めて低く、若い世代の受診を促す方策が望まれる。初診の割合は総数で26.6%あり、年齢階級別では、29歳以下が58.7%、30歳代が40.8%、40歳代が28.6%であった。がん患者の発見には、初診率の向上も必要である。

最近子宮頸がんの細胞診にベセスダシステムの分類が普及してきており、当施設でも今年度より採用している。16,947名の細胞診受診者の結果の内訳は、NILM（正常）16,557名（97.7%）、ASC-US（軽度扁平上皮内病変疑い）252名（1.5%）、ASC-H（高度扁平上皮内病変疑い）12名（0.07%）、LSIL（軽度異形成）58名（0.34%）、HSIL（中等度異形

成・高度異形成・上皮内癌）26名・17名・15名（0.15%・0.10%・0.09%）、SCC（扁平上皮癌）3名（0.02%）、AGC（腺異型・腺癌疑い）4名（0.02%）、AIS（上皮内腺癌）1名（0.0006%）、Adenocarcinoma（腺癌）2名（0.01%）であった。NILM以外の390名が要精検者であり、実際には381名が精密検査（病理組織診）を受けた。精密検査の結果の内訳は、頸がん20名（扁平上皮内癌18名、病期不明腺癌2名）、異形成36名（軽度異形成30名、中等度異形成3名、高度異形成3名）、良性疾患217名、異常なし36名、追跡中72名、受診状況不詳9名であった。ベセスダ細胞診の結果と実際の組織診の整合性については今後件数が増加してから検討していきたい。

（2）子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は556名で、子宮頸がん受診者数の3.28%であった。平成24年度が774名、平成25年度が774名であり、かなり減少した。平成18年度にがん検診指針が改正され、不正性器出血などの有症状者及びハイリスク者は、第一選択として医療機関の受診を勧奨することになった。そのため施設検診での子宮体がん検診受診者数は激減している。556名の受診者の中から、要再検0名、要精検1名が検出された。この1名の精密検査が施行されたが、子宮体がんであった。

年齢階級別に見ると、子宮頸がん検診受診者と異なり、子宮体がん検診受診者は比較的高齢者に多く、50歳代43.5%、40歳代31.5%、60歳代15.3%、70歳代5.6%、30歳代2.3%の順であった。子宮体がんが見つかった1名は、40歳代であった。

なお高齢で子宮腔内に器具が挿入できない場合は、超音波での検診も希望で施行している。平成26年度は3名が超音波検査であった。

（3）卵巣がん検診

平成26年度の受診者数は284名で、内訳は一次検診232名、二次検診52名であった。一次検診232名の中、卵巣腫瘍が判明した人が13名（5.6%）あり、二次検診に移行した。二次検診では、問診、内診、経膈超音波検査、腫瘍マーカー採血などで、定期的に卵巣腫瘍の経過を観察している。

関係の集計表は86頁に掲載